

ただひたすら神によって生きよ

ルカによる福音書19:45-48

19:45それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで商売をしていた人々を追い出し始めて、
19:46彼らに言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』
ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」

19:47毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、
19:48どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。

ルカによる福音書は預言の成就ということを大変重要視しています。他の新約聖書の書物も旧約聖書なしには深い理解はできません。けれどもルカはその中でも特に旧約を意識しています。前回のエルサレム入場の場面では、メシアはオリーブ山を通ってくるというゼカリヤ書（14：4）の預言の通り、イエス様はオリーブ山からエルサレムを見下ろしながらエルサレム入りされました。ロバの子に乗ってくるというのもゼカリヤ書9章9節を意識しています。今日の箇所ではイザヤ56章7節を意識しています。ちょっと読んでみましょう。

56:06また、主のもとに集って来た異邦人が／主に仕え、主の名を愛し、その僕となり／安息日を守り、それを汚すことなく／わたしの契約を固く守るなら

56:07わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き／わたしの祈りの家の喜びの祝いに／連なることを許す。彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら／わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。

これは異邦人の救いの預言です。もう一箇所、エレミヤ7章11節。これも読んでみます。

07:11わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巢窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。

これは神殿の墮落の預言です。イエス様が神殿でなさり語られた言葉は、かつて神がエルサレム神殿について語られた言葉だということです。神の語るべき言葉をイエスは語っておられるのです。待ち望んだ預言が成就した！それがここでの眼目です。そして、ここで語っておられるのはヤハウエその方なのだということです。

人々が待ち望んだ預言の成就是、人々の姿にも表れています。最後の48節。「民衆は皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていた。」「夢中になって」と訳したのはまずかったと思います。なんだかカルト宗教の教祖に心酔しているような表現で、「これはどうも・・・」と思うのですが、前の訳では「熱心に聞き入っていた」とありこの方がまだ良

いと思います。ここで使われている単語の辞書の訳語を見ると、「熱中する」とあります。けれどももう一つ、「ぶら下がる」という意味もあるのです。つまりイエス様の話を聞くことで、ひたすらイエス様にぶら下がるという意味です。「すぎる」「すぎりつく」という訳語が良いかもしれません。神殿というのは本来、ただひたすら神にすがって生きるようにされる場所というのが旧約の伝統です（列王記上8：27－30のソロモン王の祈りを参照）。それを考えると、全民衆がひたすら神の言葉によって生きる理想の姿がここに出現したということになります。

けれどもここに反対する勢力もありました。「祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀った。」祭司長、律法学者、民の指導者たちとは当時サンヘドリンといわれた議会の構成メンバーです。祭司のグループは世襲制の貴族たちです。律法学者というのは民衆の立場を代表する人々です。民の指導者というのは国王を初めとする行政を行う人々です。彼らは神殿を維持運営する人々でした。彼らのしたことはまじめに神に仕えることだったでしょう。けれどもそこには、人間の力を織り交ぜることで神に仕えることができるという考えがあったようです。それは神殿内に経済システムを作り上げ、祭司階級制度や立派な建造物、高価な宝物を供えることでありました。しかし彼らは自分たちが待ち望んでいたはずのメシアの到来を拒否した。つまり神に仕えるはずが、神をなおざりにし、「強盗」のように神の座を奪ってしまったのです。イエス様の幼い頃のエピソードで、迷子になったイエスを見つけとがめだてする両親にむかってイエス様が「どうして捜したのですか。私が父の家に居ることが分からなかったのですか。」と意味不明の返事をしたというのがあります。神殿はイエス様の故郷、いわば実家、イエス様は本来の場所にもどられたという理解がここにあります。「祈りの家を強盗の巣に」とおっしゃった言葉の中に、我が家を乗っ取られた、そんなイエス様の気持ちを読み取ることができるかも知れません。

ここにははっきりとした対立があります。この神殿はだれのものか？という対立です。サンヘドリンのメンバーにしてみれば、神殿を不当に占拠したのはイエスの集団でした。けれどもイエス様にしてみれば、長年神殿を不当に占拠し続けたのは地位も名誉も財産も、知恵も力も人脈もある人々の方でした。人間の努力の成果を集結する場としての神殿なのか、それとも全面的に神にぶら下がる、神にすぎる場所なのか。本当に救いを必要としている罪人の救いの場となるためには何が必要なのでしょう。ここで求められているのは全面的な神への依存です。神はそういう場として神殿を開かれたのです。人間の協力という不純物、まがい物の信仰を神は退けられるのです。

苦しみを抱えていた子どもが教会に行き始め、信仰の話をするようになると、心配になる親がいます。（ちなみに、私の父親もそうでした。）よく言われるのは、「イエス様によってすべての罪が赦され、苦しみから救ってくださると言うが、それでいいのだろうか。やっぱり自分ではないのか。神頼みは弱い人のすることだ。やっぱり自分がしっかりしていなければ。」けれどもそれではやっていけない人たちがいるのは事実です。人々が神様に救われ、また教会の中での人間関係によって救われるということがあります。それは、家族はもちろん、学校や社会の人間関係にはない何かに触れるからです。無条件の愛が漂っている体験をするのです。それは親ですら与えることのできなかつた肯定感、全面的な

神への依存がもたらす肯定感なのです。

戦後満州から親一人子一人で引き上げてきた婦人がいました。どこにも身寄りがなく、田舎町で、家政婦をして生計を立てながら娘をなんとか育てあげ、自分は格安の市営住宅で余生を送っていました。私が家庭訪問をしたとき、その婦人が自分の来し方を振り返り、こう言いました。「一足、一足でした。」と。どういう意味かお分かりになりますね。将来のことを思うと、不安でたまらない。けれども、「今日一日生きよう」、「今日も一日神様に守られた」そういう思いで生きてこられたということです。全面的に神様に委ねた人生だったということです。果たしてこの人を、こうして生き抜いてきた人を、私たちは「弱い」と言えるでしょうか。

もちろん信仰はただの受身ではありません。恵みに答えることも必要です。でもその答え方が重要です。先ほどのイザヤ書、異邦人の救いでは、安息日を守るように勧められていることに気づかれましたか。安息日とは、自分の努力の手を休め神様に委ねる生活を象徴する一日です。またエレミヤ書では、自分の既得権益を守るために、弱い立場の人、寄留の外国人つまり今で言う難民、孤児、寡婦を見殺しにしてはならない、と言われていきます。つまり、主を礼拝することは、既得権益に対して手放しでいるということと無関係ではないということです。求められているのは、神様への全面的な依存です。私たちはこれなしには救われません。そしてこれが私たち真に強くするのです。